

無之、致迷惑候。私儀被召出以來、段々御懇に被召仕、且一閑儀永々病中も御懇に御尋被遊、御厚恩之下にて天命を終へ、父子共に難有仕合。右冥加之爲め、且は亡父私を養置候茂、子孫永く御家に相續仕、御恩之下にかくれ申度存念、第一は故肥後守様御口を被入候者之遺跡に候へば、靈社之冥慮にかけ候而も、いか様とも末永く御奉公相勤申度寸志に而罷在候。自然冥加に相叶、明日にも御慈悲を以遺跡被仰付、於江戸御扶持方御合力金、一閑通に無相違被下置品にも候へば、尤可申上様も無之難有仕合に候。乍去二十年に及び御家に罷在、御様子を見及候に、或は御扶持方等被下置面々も、段々御知行に御直し被遊被下体候。然ば若くは御知行に御直し被遊被下品にも候はゞ、一閑最初被召抱時分御内意之品も有之儀に候條、三百石被下置候へ者、於私過分之仕合難有儀に奉存罷在候。此段一閑最後迄も、か様之筋に相心得可罷在旨申付相果候。私儀備前之手首尾有之段を申事に而は無御座候。子細は私一分之身を立候者、尤其筋をも立可申事に候へども、只今者一閑爲名跡罷在事に候へば、其筋を立申管にては無

御座候。只一閑被召抱候以來之一筋を守申品に御座候。何分にも御慈悲を奉願罷在上は、被下物之品兎の角のと假初にも心頭にかけて可申儀は、冥加も空恐敷候へども、藝者之儀は、親より減候へば藝に瑕つき申し、取立之師家へ對し候て迷惑に奉存品故、一身には過分之儀を心頭に含申儀に候。此段上邊之儀を、何と哉覽兼而奉計様に、人臣たる身之冥加につき申事無勿弊事に候へども、是ともは何とぞ不相變御家に行末永く御奉公仕度所願にひかれ、よしなき事を申事に御座候。思召之程も千萬御恥ケ敷候。尤御披見之後、御火中可被下候。

一、乍序御物語申上候。同氏貞之進儀、當年二拾歳に罷成申候。幼少より私取立學問爲仕、近年家業も段々引渡申候。此者儀は一閑實子之事に候へば、大抵一通り之奉公人に候はゞ、私は養子之儀、此者を名跡に被仰付被下候様にと奉願事、世間並之事に候へども、藝者之儀は畢竟藝を以被召仕品に候。然ばいまだ若輩、藝未熟之者を彼是と奉願筋は、無調法之儀に奉存候。私事世忤も所持不仕、たとへ此以後出生仕候而も、私儀最早四十歳に餘り候へ

ば、私一生に藝丈夫に取立可申事、無覺束事に候。然ば幸之儀此者私世忤と相心得、藝人に取立、行々養子に相願候へば、いつかういつまでも家業無退轉、相應之御用も辨候。微忠之品と奉存、一閑存生之内父子相談仕、一閑別紙之遺書にも其趣認置候。此段も乍序御開置被成可被下候。以上。

五月廿八日

田中左源太 判

藤田内藏允様

右上申書指出處、同年八月廿九日新知三百石賜はりたり。一閑實子貞之進宗教も、翌十六年七月二拾人扶持賜ふといへども、正徳元年正月四十歳にて歿せり。故に小瀬復庵の三男知顯を養嗣子とはなしたり。さて式如は吉川惟足の高弟にて、恒齋と號し、學力拔群なる事式如が著述せし恒齋隨筆二冊にて知られ、其の論說異議を挾むべきものなしといへり。右隨筆に載せたる知顯の序に云ふ。我恒齋嚴公、稟性于丹之宮津。勸學于備之岡山。自幼而入校。十又三而始講小學。嗚世職由于茲。爾來奔東騰西。柳風沐雨。終得倭學之宗。及耆老要述子孫警戒。其餘隨意之所欲。考著雜

事有日。漸積成篇。自題曰恒齋隨筆云々。又和語拾遺十五冊あり。是も知顯の序に、考貞簡先生。自孟游神樂岡。稟ト氏說。殆通倭語訓詁。而雖漁佛老之海獵周孔之野。情唯在國語。終歎善義之陵夷。逮晚年述倭語小解一篇。註釋凡一千餘訓。肆勤而功半。日月云暮。誠曰。汝曹宜修補。予固記倭語之二。冀續殘篇報貽言云々。とあり。貞簡先生といふも式如なり。按ずるに、一閑は吾が舊藩にて皇學者の始祖たりといへども、その博識惻惻なることは式如之に勝れる歎といへり。

○正法山眞福院

眞言宗也。貞享二年の由來書に云ふ。當寺開祖覺忠法印、利家卿之時越前國より金澤へ罷越、横山大膳奉りにて御祈禱相勤候由、代々傳承仕。當寺創立者、慶長年中長九郎左衛門上家中に寺地拜領之處、武士屋敷之内に相成に付、其後今之地拜領移轉仕。年號傳承無之。利常卿御祈禱札等指上に付被成下御書、傳來所持罷在。と記載す。龜尾記には、眞福院はもと能登國にあり。開山は同國松波の城主松波常陸介義智の子也。松波氏没落の後雜髮して一字を建